

光の王国 カーテンコール 3

薔薇の咲く城

「ああ、姫様。ちょうどいいところでお会いしました」

ケイウエリの声に、廊下の向こうから歩いてきた少女が立ち止まった。

このマイカラス王国の王妹、アイミィ・ウェル・アイサールである。

「ケイウエリ様」

長い金髪が、慣性でふわりと揺れた。

「今、お部屋に伺うところだったんですよ。花をお持ちしたのですが、姫様のお部屋に飾っていただけですか？」

ケイウエリは、抱えていた大きな花束を差し出した。色とりどりの花々が、今が盛りと咲き誇っている。

アイミィは目を輝かせた。

「まあ、素敵！ これもケイウエリ様が育てたんですの？」

「ええ」

ケイウエリは目を細めて応えた。

その逞しい体格と、騎士団一といわれる武術の腕前からは想像もできないことだが、彼の趣味は園芸である。

自分の屋敷の庭ばかりでなく、王宮の中庭にある花壇まで手入れし、育てた花は自分の手で活けてハルティやアイミィの部屋などに飾るという徹底ぶりだ。

「今日の花は特に素敵ですわ。本当にいただいてよろしいんですの？ 嬉しい！」

「では、お部屋までお持ちします」

二人は並んで、アイミィの私室へと歩き出した。

「ケイウエリ様は、本当に花を育てるのがお上手ですね。おかげで私の部屋は、いつも美しく彩られていますわ」

新しく飾られた花々を前にして、アイミィは嬉しそうに言った。

「いいえ、好きでやっていることですから」

ケイウエリはごく自然な口調で応える。

実際、美しい花を育てることは好きだったが、もっと好きなのは、アイミイの嬉しそうな顔を見ることだ。しかし、それを本人に気取られてはいけない。

「本当に、いつもありがとうございます。……でも」

花に顔を寄せて香りを嗅いでいたアイミイの声音が、微妙に変化する。そこにはどことなく、困惑したような気配があった。

「私……、ひょっとしたらって思っているのですが……あの、突然こんなこと言ってごめんなさい。ケイウエリ様……もしかして、その……」

言いくそくに、頬を赤らめている。それでも一度深呼吸してから、続く言葉を口にした。

「こうして頻繁に花を持ってきてくださるのは、その……なにか、下心とかあるのかなあ……なんて。考えすぎですか？」

いきなり図星を指されて、ケイウエリは微妙にたじろいだ。しかし、内心の動揺を顔に出すよう

な真似はしない。

多少、驚いてもいた。まさかアイミイが気づいていたとは。

しかし考えてみれば、かなり天然なところのあるアイミイも、実際は相当に聡明な女性だ。いい加減、感づかれても無理はないのかもしれない。さて、どう答えたものだろう。

ケイウエリは考える。

口だけで否定することは簡単だ。が、ここで嘘をつくのもどうかと思う。

そろそろ、はっきりさせるべきなのかもしれない。い。

これが、そのきっかけなのかもしれない。

「……ええと、まあ……否定はしません」

「まあ、やっぱり！」

アイミイの頬が赤みを増す。

驚きと困惑、そこにいくらかの恥じらいがブレンドされた表情で、両手を頬に当てる。

「もしかしたら、と思っていたのですが……やっぱりそうでしたの」

真つ直ぐにケイウエリの顔を見たアイミイは、これ以上はないというくらいに赤い顔をしていた。さて、この反応はどう解釈するべきだろう。

まったく脈なしというわけでもないような気がする。

しかしアイミイの思考は、ケイウエリの予想をはるかに超えていた。

「やっぱり……ケイウエリ様は、お兄様のことが好きだったんですのねっ?」

思わず、前回の花を飾っていた花瓶を、手から落としそうになる。

「そうだと思います。将を射んと欲すればまず馬を……ということ、私の心証をよくしよう」と

うんうん……と、アイミイは一人で納得している。

あまり物事に動じない性格のケイウエリも、さすがに啞然とした。どこをどうすれば、ここまで飛躍した思考ができるものか。

アイミイが、大胆な思考回路の持ち主であることはよく知っているが、もっと素直に考えられないのだろうか。

「ああん、やだ、そんな……どうしましょう」

アイミイは湯気が立ち上りそうなほどに紅潮した顔を手で押さえ、恥ずかしそうに身体を擦っている。しかしその表情は、なんだか妙に楽しそうだ。

「……でも、やっぱりいけませんわ。そんな、殿方同士で……」

「いや、あの、姫様……」

「ええ。ケイウエリ様のような立派な方が、そんな道ならぬ想いを抱いてはいけませんわ。せつかくの家名を汚すようなことを……」

「いえ、ですから……」

「女同士ならともかく男同士だなんて……ちょっといいかも……でもやっぱりダメ」

どうして女同士ならいいのだろう。

深く追求してみたい気もしたが、今はそれどころではない。

「第一、考えてみれば相手がお兄様というのがいけませんわ。あんな、顔だけの女つたらしの性悪男……マイカラスーの騎士であるケイウエリ様には不釣り合いです。そんなの、いけません」

自分の実兄、そしてこの国の王のことを、アイミイはぼろくそに言う。本来、仲の悪い兄妹ではないのだが、ハルティが奈子に手を出したことを、いまだに根に持っているのだ。

「ケイウエリ様、本当に女性には興味ございませんの？」

アイミイの表情は真剣だった。

本気で、ケイウエリが衆道に走ったと知っているのだろうか、氣遣うように訊いてくる。

「あ、いえ。けっしてそのようなことは……」

この誤解をどうやって解こうか……と考えていて、曖昧な返事になった。

興味がないどころか、ちゃんと、想う女性はいらぬのだ。それもすぐ目の前に。

しかしこの状況で、それをどう伝えればよいのだろう。

ケイウエリの返事に、アイミイはにこつと微笑んだ。

「それならまだ、更生できますわね。わかりました。ここは、私が力になりましょう。考えてみれば、クーデターの時にケイウエリ様は、命懸けで私とお兄様を王都から逃がしてくれましたもの。今度は私が恩返しをする番ですわ」

力強くうなずくと、アイミイはケイウエリの手を取った。

「ケイウエリ様、私と結婚してください」

「……は？」

一瞬、なにを言われたのかわからなかった。

頭の中が真っ白になる。

「私が頑張つて、女の子の良さを教えて差し上げます。どうせ私、ナコ様と添い遂げることはできないんですもの」

「いや、しかし、あの……」

「お兄様ったら、最近私にもしつこく縁談を勧めますのよ。どこの馬の骨ともわからない殿方と結婚させられるくらいなら、ケイウエリ様の方が何

百倍も素敵です。それにケイウエリ様はお兄様よりも年上ですのに、いつまでもお独りでいては疑われますわ」

矢継ぎ早に言いながら、いきなりぎゅっと抱きついてくる。

騎士団の中でもひととき大柄なケイウエリと、同世代の女性の中でもやや小柄なアイミイの取り合わせ。アイミイの頭はケイウエリの胸くらいまでしかない。

「ひ、姫様……」

「……大丈夫ですわね」

少しの間ケイウエリにしがみついていたアイミイは、にこっと笑って手を離すと、一步後ろに下がった。

「私に抱きつかれても、ジンマシンが出るとか卒倒するとかいうわけではないんですもの、更生の余地ありますわ。任せてください、きつと、お兄様なんかよりも私の方がいいと思うようになりませう。こう見えても、経験豊富な年上の侍女たちから、いろいろ教わってますのよ。実地で試すいい

機会ですわ」

とんでもないことをさらうと言う。ぱちつとウインクをするその姿は、まだまだ子供っぽいのに、どこか女の色香を漂わせていた。

「いや、しかし……」

「善は急げ。さっそくお兄様とお義姉様ダールジイに、私たちの婚約を報告してきます」

「あの、姫……」

思い込んだら猪突猛進のアイミイは、どうやらケイウエリの言葉を聞く耳は持っていないようだ。ドレスの裾をひるがえして駆け出していく。

「……なんだかなあ」

遠ざかっていく足音を聞きながら、ケイウエリは頭を掻いた。

「……ま、いいか。結果オーライということだ」

なんだか、ものすごい誤解が残ったようではあるが、そのおかげで前々から密かに望んでいたものを手に入れたのだから文句はない。

それに、誤解を解く時間はこの先いくらでもあるだろう。それは、婚礼の後でも構わないことだ。

ケイウエリは口元に微かな笑みを浮かべて、アイミイの部屋を後にした。

\* \* \*

そして数日後

「前々から、ロリコンなんじゃないかとは疑ってはいたけどね。その上、男色家だったなんて……。最低ね、ケイウエリ」

久しぶりに会ったダルジイの視線が、ひどく冷たかった。

あとがき

……いいのか？

苦勞して創り上げた『光の王国』の壮大な世界を、自分の手でぶち壊しているような気が(笑)。

とゆゝわけで、最終話でちらつと語られていた、ケイウエリ×アイミィの婚約の顛末でした。

平和ですねえ、この国は。

実際のところ、カーテンコールにもシリアスなネタはあるんです。

ただ私の場合、シリアスな話ほど長くなる傾向があるので、ついつい時間がなくて後回しにしてしまふ、と。

そろそろ、アリスの弟妹たちの話とか、ナコユイとリースリング家のご先祖様との出会いの話とかも書きたいんですけどね。

さて、次回作は何になるでしょう？

『マリア様』小ネタは、次巻が出るまで書けないだろうし、『月羽根』は長いので、早くても秋

以降になるだろうし……。

久々に『ぴゅあ いのせんす』でも書こうかなあ(笑)。

それでは、新作発表まで気長にお待ちください。

あ、最後にちよつと余談。

『創作館ふれ・ちせ』トップページのURLが変わりました。<http://nure-chise.atnifty.com/>です。短く、覚えやすくなつたでしょう？

もつとも、ファイルの実体はこれまでのサーバにあるので、既存のリンクやブックマークを修正する必要はありません。

二 二年五月 北原樹恒

Kisune@nifty.com

創作館ふれ・ちせ

<http://nure-chise.atnifty.com/>

『光の王国』公式サイト

<http://plaza4.mbn.or.jp/~kamyuchep/mila/>



## 閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

### モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

### 印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれません。(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。